大学サッカー競技を対象とした競技成績と学生のライフスキルの関係について —縦断調査からの検討—[†]

亀谷 涼* 島本 好平** 中須賀 巧***
土屋 裕睦*

Longitudinal Relationship between Results of University Soccer Competitions and Students' Life Skills[†]

Ryo KAMETANI*, Kohei SHIMAMOTO**, Takumi NAKASUGA***
and Hironobu TSUCHIYA*

Abstract

A longitudinal survey of university soccer competitions investigated whether competition results influenced Life Skills (LS) acquisition. We selected coaches in the second division (A-League) of the Kansai Student Soccer League that were similar in age, years of coaching, and coaching achievements for a longitudinal study. The study investigated the relationship between competition results and LS in participants coached by these coaches at three time-points in May, August, and December. Students from A and B universities (N = 90) participated in the study. The results indicated no significant differences between the two universities in the first-semester competition results, whereas large differences were indicated in the second semester. LS sub-factors' mean values, "goal setting" and "always making one's best effort" in December were significantly higher in University B than A. These results indicated that competition results temporarily increased LS. Previous studies have suggested that LS acquisition might determine competition results, and competition results and LS acquisition might influence each other. On the other hand, "appreciating others" in the two universities was significantly lower in August than in May, regardless of competition results, possibly because games are suspended in August. Having no family or friends to cheer the students might reduce their opportunities for thanking surrounding people. It is suggested that coaches take the initiative to teach students the critical role of feeling grateful to surrounding people at these times.

Key words : Soccer, University Students, Competition Results, Life Skills

[†]原稿受付 2020年10月22日 原稿受諾 2021年2月27日

*大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科 〒590-0459 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

**明星大学教育学部 〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1

***兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻 〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

*Graduate School of Sport and Exercise Sciences, Osaka University of Health and Sport Sciences, 1-1, Asashiro-dai, Kumatori-cho, Sennan-gun, Osaka, Japan (590-0459)

**Faculty of Education, Meisei University, 2-1-1, Hodokubo, Hino, Tokyo, Japan (191-8506)

***Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1, Shimokume, Kato, Hyogo, Japan (673-1494)

1. 緒 言

サッカー競技の現場では、競技力向上と同時に個人の望ましい人間形成を意識した指導がなされている。県大会で上位の成績を収めている高校サッカー部の指導者を対象とした研究¹⁾では、全ての指導者が「人間教育」を重視している。競技成績の高いチームの指導者は、競技力向上だけでなく、スポーツ活動を通して人間形成の指導にも力を注いでいることが考えられる。

スポーツ活動を通して人間形成を図るための1つの方略として、ライフスキル (Life Skills; 以下LS) 獲得の働きかけが行われている。LSについては、「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処する能力 (世界保健機構; 以下WHO²⁾)」と定義されている。実際に国内では、LSの獲得を目的としたプログラムの開発が盛んに行われ、サッカー³⁾、ハンドボール⁴⁾、硬式野球⁵⁾、ラグビー⁶⁾など多くの種目において、LSプログラムが実践され、その成果が報告されている。また、国内のみならず国外でも、スポーツを通してLSを獲得させることを目的とした総合的な教育プログラムが組み込まれている。例えば、アメリカでは青少年のLSを獲得させる「GOALプログラム⁷⁾⁻¹⁰⁾」や全米大学体育協会財団のサポートにより開発された「Champs/Life Skillsプログラム¹¹⁾」など多くのLSプログラムが開発されている。その他、オーストラリア、ニュージーランドなどでもLSプログラムの開発が実施されている¹²⁾。したがって、今後指導者はスポーツ活動を通して、競技力向上のみならず望ましい人間形成に向けLS獲得も意識した指導方法も同時に求められることが考えられる。

また、先行研究では競技成績とLS獲得の関係に正の相関関係が報告されており、競技レベルの高い学生競技者ほどより望ましいLSを有している¹³⁾ことや心理的競技能力が高い選手はLSの程度も高い¹⁴⁾ことが明らかとなっている。

競技成績とLSの因果関係に着目すると、LS獲得が競技成績に及ぼす影響について、これまでにいくつか検討されている。大学生アスリート用ライフスキル評価尺度¹⁵⁾を使用し、大学生男子レスリング選手を対象とした研究¹⁶⁾、高校生ゴルフ選手を対象とした研究¹⁷⁾、さらには大学生柔道選手における研究¹⁸⁾のいずれにおいても「目標設定」、「最善の努力」について、選手のLS獲得が競技成績に正の影響を与えている可能性が示唆されている。

これらのことから、両変数の関係性を明確にしていくためには、LS獲得から競技成績の向上につなげていく一方向だけでなく、競技成績が、LS獲得にどのように影響するのかを検討するために、LSの推移を縦断的に調査していく必要があるだろう。

そこで、本研究では大学サッカー競技に着目し、競技成績とLSの関係について縦断的に検討することで、競技成績がLS獲得に影響を及ぼすのかどうかについて検証することとした。

2. 研 究 方 法

2.1 調査対象者

調査対象者は、関西学生サッカーリーグ2部Aリーグに所属している2大学のサッカー選手、男子大学生102名であった。その内、調査に不備なく回答した90名 (A大学男子46名: 4年生4名・3年生14名・2年生9名・1年生19名、B大学男子44名: 4年生7名・3年生6名・2年生13名・1年生18名) を分析対象とした (有効回答率88.2%)。チーム編成は2大学ともにA・Bチームそれぞれ25名程度である。また、公式戦でベンチに入れる人数は18名であるが、1シーズンを戦う上で人が人やコンディションの高低差が生じ選手の入替が頻繁に行われている。実際、前年度の2大学の出場選手がベンチ入りも含めて30名を超えていることから、今回の調査はA・Bチームに所属する選手を対象とした。

図1 関西学生サッカーリーグの開催期間と調査時期

2.2 調査時期と手続き

調査は2016年の関西学生サッカーリーグの1シーズン（4月から11月）における5月（シーズン序盤）に調査1を、8月（リーグ戦の前期終了後の中断期）に調査2を、そして、12月（シーズン終了後）に調査3の計3時点で実施された[図1]。シーズン開始後に調査1を実施した理由は、4月に入学した1年生を含めて全学年に統一した形で4月1日以降の1カ月を振り返ってもらうために、1年生に入学後1ヵ月程度の活動期間を設けることで大学の活動を鮮明にしてもらうためである。調査実施に際し、第一著者が2大学のサッカー部指導者に、調査の目的および方法や個人情報への配慮等について十分な説明を行い、日本体育学会が定める倫理要綱に則り対応した。調査の概要および個人情報への取り扱いについて各大学の指導者が十分な説明を行った後、配布された。調査票への記入は指導者による説明後に実施され、選手による実施・回収後、厳封され回答を指導者が確認できないよう配慮がなされた。また、参加者が不利益をこうむると考えた場合はいつでも回答が中止できるよう配慮を施した。なお、すべての調査は匿名性を担保するため、またデータを照合させる必要があるゆえ予め番号を付与し実施された。

手続きとして、初めに、4月から11月迄実施される関西学生サッカーリーグの概要について述べる。構成は1部リーグ12チーム、2部Aリーグ10チーム、2部Bリーグ10チームと3部リーグ（Aブロック9チーム、Bブロック10チーム、Cブロック10チーム）となっており、それぞれ

のリーグで上位チームや下位チームに昇格と降格の権利が与えられる。この2大学が所属する2部Aリーグは、全10チームによる2回戦総当たりで、前期（4月から7月）の9試合と8月の中断期を挟み、後期（9月から11月）の9試合の計18試合で実施される。10チームのうち1位と2位は1部リーグとなる上位リーグに自動昇格でき、3位と4位は上位リーグとの入替戦に挑む。また、最下位の10位は2部Bリーグとなる下位リーグへ自動降格となり、7位から9位は下位リーグとの入替戦に挑むことになっている。関西学生サッカーリーグ2部Aリーグを選定した理由は、上記概要より1年後に昇格、降格、もしくは残留と競技成績により3カテゴリーに分けられ、最大で10チーム中8チームが入れ替わる可能性があり、リーグ内で最も順位が熾烈な環境に置かれていることに着目したためである。

2.3 調査内容

2.3.1 大学生アスリート用ライフスキル評価尺度

本尺度は島本他¹⁵⁾が開発したもので、「目標設定（例：目標は考えるだけでなく、紙に書き込むようにしている）」、「考える力（例：あれこれと指示を受けなくても、次にどうすればよいか考えることができる）」、「最善の努力（例：なかなか周囲に認められなくても、辛抱強く努力しつづけることができる）」、「責任ある行動（例：同じような失敗を二度繰り返さないようにしている）」、「ストレスマネジメント（例：悩み事を一人で解決できない時には、誰かに相

談するようにしている)」、「感謝する心(例:お礼の言葉は、はっきりと声を出して伝えている)」、「コミュニケーション(例:チームのメンバーの前では本当の自分を表現することができる)」、「礼儀・マナー(例:試合中に悪質なヤジを飛ばすようなことはしない)」、「謙虚な心(例:たとえほめられたとしても、いつまでもその事で浮かれることはない)」、「体調管理(例:食事は自分に必要な栄養素を考えながら摂取している)」という計10下位尺度、各尺度4項目ずつの合計40項目から構成される〔表1〕。項目の評定は「1:ぜんぜん当てはまらない, 2:あまり当てはまらない, 3:わりと当てはまる, 4:とても当てはまる」という4段階の自己評定で行い、評定値が高いほど当該スキルの獲得レベルが高いと解釈される(逆転項目の評定値は当該下位尺度得点算出の際に反転処理された)。なお、調査実施に際しての教示文は、「競技場面を含めた日々の生活全体における様子についてお聞きます。以下の各々の項目について、4つの選択肢の中から現在の自分に最も当てはまる数字1つに丸印を付けてください」とし、4月1日以降の1ヵ月、前期(4月から7月)の振りかえり、そして後期(9月から11月)を振りかえりながら調査実施時点における自身の様子について回答を求めた。

2.4 統計処理

分析は、A大学とB大学のLSの獲得レベルについて検証するため、独立変数を大学と時期、従属変数をLS評価尺度の各下位尺度得点とし、大学を参加者間要因、時期を参加者内要因とする混合計画の2要因分散分析を実施した。また、交互作用が有意であった際には、多重比較を実施した。分析にはIBM SPSS Statistics version 25.0, HAD16_101¹⁹⁾を使用し、有意水準は5%未満とした。

3. 結 果

3.1 関西学生サッカーリーグ2部Aリーグにおける各大学の競技成績

競技成績については、A大学について前期は下位の成績を収め、後期は中位程度の成績となり、年間では下位となったが入替戦で勝利したため翌年度の残留が確定した。一方のB大学について、前期は中位の成績を収めたが、後期は上位の成績を収め、年間では上位の順位となり翌年度の上位リーグへ昇格を果たした。

3.2 2要因分散分析の結果

大学と時期の2要因分散分析を行った結果〔表2〕、「目標設定」において、大学要因の主効果及び時期要因の主効果、さらに交互作用が有意であった(順に $F(1,88)=5.84$; $F(2,176)=12.17$; $F(2,176)=4.86$, $p<.01$)。まず、大学要因の各水準における時期要因の単純主効果の検定を行ったところ、12月において有意な単純主効果が認められた($F(1,264)=13.72$, $p<.01$)。多重比較を行ったところ、B大学($M=10.70$, $SD=2.81$)がA大学($M=8.80$, $SD=1.96$)よりも平均値が有意に高いことが明らかになった〔図2〕。次に時期要因の各水準における大学要因の単純主効果の検定を行ったところ、B大学において有意な単純主効果が認められた($F(2,176)=15.82$, $p<.01$)。多重比較を行ったところ、12月($M=10.70$, $SD=2.81$)が8月($M=9.20$, $SD=2.73$)、5月($M=8.93$, $SD=2.82$)よりも平均値が有意に高いことが明らかになった〔図2〕。

また、「最善の努力」においても、大学要因の主効果及び時期要因の主効果、さらに交互作用が有意であった(順に $F(1,88)=4.88$, $p<.05$; $F(2,176)=3.97$, $p<.05$; $F(2,176)=3.41$, $p<.05$)。まず、大学要因の各水準における時期要因の単純主効果の検定を行ったところ、12月において有意な単純主効果が認められた($F(1,264)=13.72$, $p<.01$)。多重比較を行ったところ、B大学($M=12.80$, $SD=2.21$)がA大学(M

表1 アスリート用ライフスキル評価尺度の項目内容 (島本ほか, 2013)

下位尺度	項 目
ストレスマネジメント	<p>悩み事を一人で解決できない時には、誰かに相談するようにしている</p> <p>悩み事は包み隠さず相談相手に打ち明けるようにしている</p> <p>悩み事はきちんと話を聞いてくれる人に打ち明けている</p> <p>悩み事は相談相手に素直に打ち明けている</p>
目標設定	<p>目標は考えるだけでなく、紙に書き込むようにしている</p> <p>一週間や一カ月、半年単位と、ある期間ごとに目標を立てている</p> <p>目標を達成するための計画を具体的に立てている</p> <p>強く意識しつづけるために目標をノートやスケジュール帳に書き込んでいる</p>
考える力	<p>あれこれと指示を受けなくても、次にどうすればよいか考えることができる</p> <p>成功や失敗の原因を自分なりに分析してみることができる</p> <p>問題や課題への解決方法を、自分自身で見出すことができる</p> <p>周囲の人の考えをもとに、自分なりの答えを導き出すことができる</p>
感謝する心	<p>お礼の言葉は、はっきりと声を出して伝えている</p> <p>「ありがとう」の気持ちを素直に表現することができる</p> <p>自分を支えてくれている人への感謝の気持ちを、いつも胸に留めている</p> <p>家族や親しい友人であっても、感謝の気持ちはきちんと伝えている</p>
コミュニケーション	<p>チームのメンバーの前では本当の自分を表現することができる</p> <p>チームのメンバーとは誰とでもコミュニケーションがとれている</p> <p>同学年だけでなく、先輩や後輩、指導者ともうまく付き合っている</p> <p>チームのメンバーとはプライベートも含め幅広く交流するようにしている</p>
礼儀・マナー	<p>試合中に悪質なヤジを飛ばすようなことはしない</p> <p>感情的な挑発行為や言動は行わない</p> <p>対戦相手や審判に失礼になるようなことはしない</p> <p>反則されても仕返しするようなことはしない</p>
最善の努力	<p>なかなか周囲に認められなくても、辛抱強く努力しつづけることができる</p> <p>なかなか成果が出ない時でも、自分を信じて努力しつづけることができる</p> <p>目標の達成に向けて、一步一步着実に努力していくことができる</p> <p>単調な作業の繰り返しでも、地道に取り組むことができる</p>
責任ある行動	<p>同じような失敗を二度繰り返さないようにしている</p> <p>失敗をした時には、すぐにその分を取り返そうと努力する</p> <p>ここぞという場面では、持てる力を全部出し切るようにしている</p> <p>失敗から得た教訓を今後活かしている</p>
謙虚な心	<p>たとえほめられたとしても、いつまでもその事で浮かれることはない</p> <p>過去の栄光や成功にいつまでもとらわれないようにしている</p> <p>調子に乗りそうな時でも、その気持ちをうまく抑えている</p> <p>いつも自分が絶対に正しいとは思わないようにしている</p>
体調管理	<p>食事は自分に必要な栄養素を考えながら摂取している</p> <p>適度な睡眠をとり、次の日に疲れを残さないようにしている</p> <p>同じような物ばかり食べていて、食生活が偏食気味である (R)</p> <p>用もないのに夜更かしをしている (R)</p>

注) (R)：逆転項目

表2 大学と時期の2要因による分散分析結果

時期 大学	5月		8月		12月		主効果		交互作用 F値	
	M (SD)	A大学 (n=46)	B大学 (n=44)	A大学 (n=46)	B大学 (n=44)	A大学 (n=46)	B大学 (n=44)	大学 F値		時期 F値
目標設定		8.37 (2.10)	8.93 (2.82)	8.52 (2.05)	9.20 (2.73)	8.80 (1.96)	10.70 (2.81)	5.84*	12.17**	4.86**
コミュニケーション		11.67 (2.10)	12.18 (2.62)	11.76 (1.98)	12.16 (2.34)	12.07 (2.17)	12.45 (2.54)			
ストレスマネジメント		11.76 (2.38)	11.91 (3.32)	11.17 (2.44)	11.80 (2.73)	11.59 (2.95)	12.34 (2.57)			
体調管理		9.83 (1.78)	10.02 (1.15)	10.09 (1.70)	10.02 (1.45)	10.17 (1.62)	10.18 (1.48)			
最善の努力		11.83 (1.80)	12.14 (1.86)	11.37 (1.95)	11.80 (1.58)	11.50 (1.57)	12.80 (2.21)	4.88*	3.97*	3.41*
礼儀マナー		11.78 (2.48)	12.14 (2.71)	11.67 (2.12)	2.56 (0.39)	11.89 (2.14)	12.41 (2.98)			
責任ある行動		12.17 (1.70)	12.95 (1.80)	12.20 (1.36)	12.34 (1.71)	12.50 (1.66)	12.93 (2.29)			
考える力		11.39 (1.88)	11.98 (2.01)	11.46 (1.72)	11.52 (1.95)	11.74 (1.87)	12.11 (2.20)			
謙虚な心		11.91 (1.84)	12.23 (1.98)	11.93 (2.00)	11.98 (2.20)	12.02 (1.94)	12.70 (2.32)			
感謝する心		13.72 (1.75)	13.95 (2.08)	13.43 (1.90)	13.23 (2.57)	13.78 (2.21)	13.59 (2.46)		3.37*	

注1) ** $p < .01$, * $p < .05$ 注1) ** $p < .01$, * $p < .05$

図2 大学要因の各水準における時期要因と大学要因の「目標設定」

注1) * $p < .05$

図3 大学要因の各水準における時期要因と大学要因の「最善の努力」

=11.50, $SD = 1.57$) よりも平均値が有意に高いことが明らかになった [図3]。次に時期要因の各水準における大学要因の単純主効果の検定を行ったところ、B大学において有意な単純主効果が認められた ($F(2,176) = 15.82, p < .01$)。多重比較を行ったところ、12月 ($M = 12.80, SD = 2.21$) が8月 ($M = 11.80, SD = 1.58$) よりも平均値が有意に高いことが明らかになった [図3]。

「感謝する心」においては、時期要因の主効果が有意であった ($F(2,176) = 3.37, p < .05$)。多重比較を行ったところ、8月 ($M = 13.33, SD = 2.24$) が5月 ($M = 13.84, SD = 1.91$) と比較し平均値が有意に低いことが明らかになった [表2]。「ストレスマネジメント」・「考える力」・「コミュニケーション」・「礼儀・マナー」・「責任ある行動」・「謙虚な心」・「体調管理」には有意な差が見られなかった。

4. 考 察

競技成績より、2大学は前期終了時点では1勝差で、順位に関してはほぼ差がなかった。しかし、後期に成績を伸ばしたB大学は上位リーグへ昇格し、A大学は下位となり入替戦で勝利し残留した。これらの成績と関連するように、シーズン終了後の12月時点の「目標設定」と「最

善の努力」でB大学がA大学と比較し有意差が認められた。すなわち、競技成績がLSに影響を与えたと考えられる。その理由について、8月まで2大学においては競技成績と「目標設定」と「最善の努力」に差がなかったが、シーズン終了後の12月の平均値にはいずれのLS因子にも有意差が認められたからである。このことからB大学は優れた競技成績により、一生懸命に取り組み結果を残せたという満足感が、一時的に「目標設定」と「最善の努力」に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。しかし、LSは「経験を通じて獲得可能」であり、一過性のものであってもこのような経験を積み重ねていくことが重要であると考えられる。

また、この2大学においては、「感謝する心」について、リーグ戦中断期となる8月に一旦低下してしまうことが確認された。しかし、「感謝する心」は他の因子と比べ平均値が高い状態で推移している [表2]。あえて低下した理由を述べるとすると、「感謝する心」は質問項目より「お礼の言葉は、はっきりと声を出して伝えている」こと等、周りへの感謝ができていくかどうかである [表1]。普段公式戦では多くの家族や友人が応援に駆けつけ声援を送る。中断期となる8月は、そのような機会が減り一時的に感謝する機会が失われたからであると考え

られる。

調査時期について述べると、調査1は新入生の大学の活動をより鮮明に振りかえってもらうためシーズン開始後に実施した。しかし、シーズン前に実施せずさまざまなバイアスがかかった可能性は否定できない。また、シーズン前からLSの得点が高かったことは否定できないため、シーズン序盤の調査時期は限界点であると思われる、今後の課題の一つと言える。

競技成績とLSとの因果関係を検討する中で、勝利に向けた活動やその結果がLSに及ぼす影響を総合的に見ていくと考えると、競技成績の向上が「目標設定」と「最善の努力」のLS因子に一時的に影響することが確認できた。これらのことから、勝利を追求する活動には意義があることが確認された。しかし、単に結果のみを追求するのではなく、明確な目標設定や最善の努力を選手に提示することにより、良い競技成績がLSの因子に影響を及ぼすことを念頭に指導を実践しなければならない。

5. 結 論

本研究の目的は、大学サッカー選手を対象として、サッカー競技における3時点の縦断的調査により、競技成績とLSの関係について検討し、競技成績がLS獲得に影響を及ぼすのであるかどうか検証することであった。分析の結果、A大学とB大学の比較では競技成績が同程度であった中断期の8月までは、2大学にLS因子の平均値に有意差は認められなかった。しかし、シーズン終了後の12月には、成績の高かったB大学がA大学と比較し「目標設定」、「最善の努力」で有意差が認められた。先行研究^{16) - 18)}では、LSの獲得が競技成績を決定する要因の一つになる可能性が示唆されたが、本研究では競技成績がLSを高めていた。これらのことから、競技成績とLSの獲得とは互いに影響を及ぼし合っていることが示唆される。本研究の場合、シーズン終盤では競技成績によるLSへの影響が認められたが、その競技成績にはシーズン序盤や中盤におけるLSが影響を及ぼしていた可

能性があるからである。今後指導者はスポーツ活動を通して人間形成をはかるうえで、競技力の向上を念頭に置いて指導することにも、LS獲得に影響を与えることが出来ることが示唆された。また、「感謝する心」において、時期要因による8月の平均値が5月より有意に低い値となった。このような時期こそ指導者は、「感謝する心の育成を促すコーチング²⁰⁾」をチーム内において率先して実践し、周りへの感謝を再認識させていくことが重要と考えられる。

6. 今後の展望

今後、さらに競技成績やLS獲得の検討をはかるのであれば、1シーズンだけではなく数年単位の長い期間をかけ、複数のチームを調査することが求められる。そして、チームの指導方針や指導者の保有資格についても言及することで、より選手のLS獲得に向けた指導方法が鮮明になってくると考えられる。

参 考 文 献

- 1) 加藤篤, 堀野博幸: 競技レベルの違いとコーチング・メンタルモデルーX県内高校サッカー指導者の事例研究ー。スポーツ科学研究, 11, pp.146-158, 2014.
- 2) WHO; WHOライフスキル教育プログラム, 川畑徹朗, 西野伸紀, 高石昌広, 石川哲也監訳, 大修館書店, pp.9-30, 1997.
- 3) 上野耕平; ユース選手を対象としたライフスキルプログラム, 体育の科学, Vol.55, No.2, pp.101-105, 2005.
- 4) 東海林裕子; ライフスキルプログラムの実践, Sportsmedicine, Vol.21, No.7, pp.36-38, 2009.
- 5) 松野光範, 他; 「ライフスキル教育」開発プロジェクトの実践と課題ー硬式野球部の取り組みを事例としてー, 同志社大学スポーツ健康科学, Vol.2, pp.61-72, 2010.
- 6) 東海林裕子, 堀越正巳; 子どもに夢を持つことの大切さを伝えたいー熊谷ライオンズクラブ45周年事業にてー, Sportsmedicine, Vol.23, No.4, pp.29-33, 2011.
- 7) Danish, S. J.; Interventions for enhancing adolescents' life skills. The Humanistic Psy-

- chologist Vol.24, pp.365-381, 1996.
- 8) Danish, S. J. : Going for the goal : A life skills program for adolescents. In : G. W. Albee & T.P.Gullotta (Eds.) Primary prevention works. Thousand Oaks, CA : Sage, pp.291-312, 1997.
- 9) Danish, S. J. : Youth and community development : How after-school programming can make a difference. In : S. J. Danish & T. P. Gullotta (Eds.) Developing competent youth and strong communities through after-school programming. Washington, DC : CWLA Press, pp.275-301, 2000.
- 10) Danish, S. J. & Nellen, V. C. : New roles for sport psychologists : Teaching life skills through sport to at-risk youth. Quest Vol.49, pp.100-113, 1997.
- 11) Carr, C. & Bauman, N. J. : Life skills for collegiate student-athletes. In : E. F. Etzel, A. P. Ferrante, & J. W. Pinkney (Eds.) Counseling college student-athletes : Issues and interventions. (2nd ed.) Morgantown, WV : Fitness Information Technology, pp.281-307, 2002.
- 12) Petitpas, A. J., et al. : A framework for planning youth sport programs that foster psychological development. The Sport Psychologist, Vol.19, pp.63-80, 2005.
- 13) Murakami, K., et al. : The relationship between daily-life skills and sport experience for adolescents. Human Performance Measurement. Vol.1, pp.1-14, 2004.
- 14) 和田光一郎, 他 ; 高校ラグビー選手の心理的競技能力とライフスキルに関する研究, 日本体育学会, Vol.52, p.281, 2001.
- 15) 島本好平, 他 ; アスリートに求められるライフスキルの評価 - 大学生アスリートを対象とした尺度開発 -, スポーツ心理学研究, Vol.40, No.1, pp.13-30, 2013.
- 16) 清水聖志人, 島本好平 ; 男子大学生レスリング競技者におけるライフスキルと競技成績との関連, 体育経営管理論集, Vol.4, pp.47-53, 2012.
- 17) 島本好平, 米川直樹 ; 高校生ゴルフ競技者におけるライフスキルと競技成績との関連, 体育学研究, Vol.59, No.2, pp.817-827, 2014.
- 18) 山本浩二, 他 ; 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得が競技成績に及ぼす影響, 武道学研究, Vol.51, No.2, pp.75-87, 2018.
- 19) 清水裕士 ; フリーの統計分析ソフトHAD, 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案, メディア・情報・コミュニケーション研究, No.1, pp.59-73, 2016.
- 20) 壺阪圭祐, 他 ; ライフスキル獲得を促すスポーツコーチングスキルの因子構造の検討, 日本スポーツ心理学会第42回大会研究発表抄録集, pp.20-21, 2015.